

モンペリエ第三大学教授 Josiane Mas 先生の講義紹介

井上 富江

今年は3年前に学生を引率して来学してくださった Josiane Mas 先生が交換教授として10月に来学し、「1920年代におけるオペラとバレエ」というタイトルで講義していただきました。3月に山本晴樹先生がモンペリエ第三大学に講義にいらして下さったのでこれで初回の井上、シアリー教授、2年目の飯沼教授とロバン教授、そして今年度と3年続けてきちんと交換教授が行われたことになる。日本にはたくさんフランスの大学と姉妹校を締結しているところはあるが、学生と教員の両方とも双方向できちんと交流が行われているのは、大変に珍しいケースであろう。

さて今年は音楽学が専門のマス教授がどのような講義をしてくださるのかわくわくして準備を始めたのだが、まず映像と音楽が多いDVDを大学院の講義で扱ったことがなかったので先生も私自身もとても不安だった。

講義が始まる日まで何度もメディアセンターの方や教務の方に無理をお願いしてDVDが教室で使えるように操作の仕方、音響（先生は専門が専門なので特に音がきちんと聞こえることに神経質になられていた）等のチェックをしていただいた。入念な準備にもかかわらず最初の講義では映像がうまく映せないトラブルが発生し、あわててしまった。何はともあれ皆の応援の甲斐あって、何とか講義を続けることができた。

その内容の面白い事、面白い事。日頃全然音楽にも美術にも講義では出会わない学生たちまで目をキラキラさせて聞き入っていた。フランスに行く度にオペラやバレエに足を運ぶのを楽しみにしている、私自身も本当に知らないことばかりで、通訳しながらびっくりしてしまった。1920年代がこんなにフランスの前衛芸術家をバレエ創作にかき立てたことは誰も想像だにしないことであろう。コクトーがバレエの脚本を書いたなど誰が知っていたらどうか？ピカソが舞台装置や緞帳を担当し、ストラビンスキーやムソルグスキーが音楽を、そしてシャネルが衣装を担当するなんてこんな豪華な顔ぶれでバレエが作られたなど、日本では少なくとも一度も聞いたことはなかった。学生は「バレエなんて僕の専門ではないし」とか「1920年代なんか興味ないなー」とか思っていたであろう。それが講義がすすむにつれて外部の方々もこんなに面白い講義はないと興味深々と公開講座も沢山の人が聴講にきてくださった。講義の時間が限られていたので、それぞれの作品の抜粋しか見せられなかったのだが、講義終了後学生たちが「あのDVD全部ゆっくり見せて下さいね。」と私のところに来た。マス先生の許可を得てまた全部を学生たちに見せる約束をし

ている。ここでは先生がどのようなバレエを取り扱ったのか先生原稿の一部を簡単に紹介することにしよう。映像も音楽もないのが本当に残念である。モンペリエ第三大学やフランスの大学には－ソルボンヌも含めて－音楽学が文学部にあって、学生はこのような講義を聞き、論文を書いて修士号や博士号をとっているとか。日本の大学の文学部にいつこのような講義が専門で聞けるようになるのであろうか？

ここに紹介されたバレエには、くわしい解説がつけられ、衣裳の原画もたくさん見せて下さった。映像も音楽もそれはすばらしいもので、1920年代がどんな時代であったのかを申し分なく理解させていただいた。通訳をさせていただいたおかげで、たくさん学ぶことができた。Mas先生には心から感謝している。Mas先生の許可を得てメディアセンターの映像ライブラリーにぜひ、あのDVDを入れさせていただきたいと思っている。